
世界を壊せや勇者様～world is broken a man of valour～

翡翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を壊せや勇者様（world is broken am

a n o f v a l o u r）

【Zコード】

N9191W

【作者名】

鷗白 翠

【あらすじ】

俺は昨日、前からずっと好きだった少女、朱里に告白した。OKをもらえて、最高にテンションがハイになっていた。なかなか眠れぬ夜も、終わり、何とか眠れた次の日、目が覚めるとそこは異世界だつた……！？

異世界に転移されたくなかった主人公が世界を壊そつと反逆する！主人公最強型超厨二復讐ファンタジー！！

一話、異世界に召喚されたら、そこは夢とこいつの胸（乳）があつ……！？

目が覚めた。ここはどこだらう。前後の記憶が曖昧だ。目を開けた。目の前に見えるのは？ 乳、乳、乳。

「はー？」

俺は悲鳴をあげた。何故俺の目の前に巨乳があるのだらうか？ まったくもって判断できない。前後の記憶も曖昧なまま。記憶喪失なのか？ と、自問する。

「お目覚めですか、勇者様？」

田の前のデカ乳美少女が俺に聞いてくる。ふつうの男なら一目惚れしていただろう。並の男じゃなくとも一目惚れしていただろう。人形のような端整な顔立ちに、スラリとのびた、長い髪。俺だってきれいだと思う。だが、俺は、

貧乳派だ。

派閥というので、自分の欲望は抑制できるものだと、俺は今知った。グルッと周りを見る。ここは……石造りの部屋だつた。石造りといつても、不思議なことにごつい雰囲気は全くなく、神秘的な感じがした。自分の下にある魔法陣もそう思わせる一因になつているだろう。ただ、

「ここはどこだ？」

俺が疑問の声をあげるような場所だというのは確かだ。神秘的だといつても魔法陣は魔法陣。オカルト的な感じがするといつてもいい。それと、目の前の美少女。俺を勇者様と呼んだ。その一つから仮定する。俺は異世界に転移された。または、ただ単に誰かのいたずら。その一つの可能性が考えられた。だが、冷静に考える。魔法陣と、今の俺の思考。どっちが非科学的か……

俺の思考だな。

「ここはどこだ？」

わからないならとりあえず質問。これまで16年だか17年だか

生きてきて、俺が得た結論だ。

「ijiですか……帝国神殿ですね……」

帝国……帝国か。俺がもと居た地球という世界では、帝国なんて聞いたことがない。

「なに帝国だ？」

当然のことを見た。その前の名前がわかれれば、地球……のことがなか。それ以外の世界なんかがわかる。ドッキリという線は、目の前の美少女が着ている服。無駄に高そうな神官服。使い込んでいる雰囲気があり、なおかつ神聖で高そうだ。こんな服を用意するとは、一介の高校生にするドッキリとしては度が過ぎていいだろ？

「ミルド帝国ですね」

そんなことも知らないのか。勇者様は、とでも続きそうな調子で、美少女は言った。

「ありがとうございます」

感謝し、俺は立ち上がった。こんな場所にいる意味はない。俺は早くもとの世界に戻るんだ。

俺は歩きだした。早く朱里に会いたい。その一心で、俺は歩きだした。だが、美少女が止める。もう一度冷静になつて周りを見渡すと、ほかにも何人も巨乳美少女が居た。貧乳は居なかつた。残念だ。「どこに行かれるのですか？」

はじめの巨乳美少女に質問された。

「もとの世界」

一つだけ呟くと、俺はまた歩きだした。また止められる。そんなに俺と話したいのか。俺は話したくないんだがな。

「王様と謁見していただきないと……」

困ったように巨乳美少女は言つ。やつきの服が神官っぽいから、エルフちゃんでいいや。

「王様？」

と俺は聞く。王様が居る国なんていくつあるだろ？ 無知な俺は地球の知識でもわからない。まあ、仕方ない。俺は無知だ。

「はい。王様です。勇者様を召還されたので、任務を頼みたいと仰つております」

勇者。任務。その一つのキーワードから連想されるもの……魔王。俺は魔王討伐の手駒にされるのか？ 俺は元の世界に帰りたいだけなのに。だが、王様と言つんだから、元の世界に帰る方法くらい知つていいのではないか。俺は考えた。

「わかった。行くよ」

十数秒後、俺はそう答えていた。

「話題、反逆の狼煙を上げるのか？」の帰属からやっこよむなー？（前書き）

誤字や脱字を見つけた方は報告していただけるとありがたいです。

「話、反逆の狼煙を上げるのはこの部屋からでいいよなっ！？」

巨乳エルフに連れてこられた先は、厳格な雰囲気がある、扉だった。無駄に沢山の装飾が施されている。成金趣味とは違った空気を持つ、気位の高そうな扉だつた。

「この先か？」

俺は聞いた。この扉の先に、俺をこんなところに連れてきた張本人がいるのか？ 俺は迷つた。この先に行つて、素直に魔王討伐の任務を受けるのか？ わからない。とりあえず、後のことは後に決めることにした。

「はい。この先に王様がおります」

当然のようにエルフは答えた。

「入つていいのか？」

再度聞く。まあ、断られるわけはないだろう。

「はい、無礼がないようにしてください」

勇者より、王族の地位の方が高いのか。仕方がない。

「わかった」

そう言ってから俺は、扉を開けた……

空気が変わつた。頭を全包围から刺すような空氣。それが俺の頭上から発せられていた。やばい、俺は思った。呑まれる。この空氣に呑まれたら、俺の自我はなくなる。直感的にそう思った。

「頭が高い！！！！！」

宰相？ だらうか。背が高く、すらりとした雰囲気を持つ男が、言葉を発する。それと同時に、宰相らしき男の横にいた王が、こちらへ視線を……

痛い。痛い。痛い。視線が痛い。気を抜かずとも、このままでは、呑み込まれる。痛い視線を受けた瞬間。思考すると同時に、俺は頭を下っていた。これは、やばい。

「そちが、今代の勇者か？」

王が聞く。

「はい、そうあります」

俺は答えた。呑まれそうになりながら、何とか、言葉を発した。
「そうか、魔王討伐を、【頼めるか？】

グサツ、言葉の針が俺を貫いた。なんなんだろうか。頼めるか？
のところに、異様に力がこもっている気がした。魔王討伐のこと
など、俺の頭から抜け落ち、この王の力ばかりに目がいく。そして、
召還した勇者相手に威圧的な方法を取る王に従うことができるの
か？

その疑問にたどり着いた。いいのか？ 従つて俺は魔王討伐の手
駒になつていいいのか？ そして……魔王討伐にいつたら、元の世界
に……、朱里の所に、戻れるのか？

「つかぬことをお聞きしますが、」

俺は言葉を発し始める。なんだらう。一瞬部屋の中がザワツいた
氣がするが、俺は上から来る空気に対抗することで、精一杯だった。
「なんじや、言うてみい」

若干挑発的な態度。俺はそう思つた。挑発……しているのだ。こ
の王は、勇者を挑発しているのだ。なんだらう、殺意？ が湧いて
きた。

「俺が元の世界に戻れる方法つて、ありますかね？」

向こうが挑発してくるなら、こっちだつて挑発し返してやる。挑
発するような口調を入れて、俺は言った。

「魔王でも倒せば、帰れるんじやないのかえ？」

疑問に疑問で返された。ふざけたよつな口調。嘘か真かは、俺に
判断できない。判断したい……。頭の中に真贋判定という文字が踊
った。真贋判定>アリスイアブセマくやつてやる。それと同時に、
俺の頭の中に、文字が流れた。

「贊です」

そうか、と俺は一人うなづく。

顔までうなずいていたのだろう。部屋の空気が一瞬疑問の色に彩られた。

「嘘はいけませんね。王様？」

この人たちは本当に王様を尊敬しているのだろう。俺への敵意が増えた。そんな気がした。

「ばれてしまふたか」

笑いながら王様は立

「本当の所、前列がないのでわからぬ」のじやが

そう言つ。真贋判定へアリスイアブセマヘ。俺は

◀ ◌

「真です」

そうか、納得。ただし、この真贋判定アリスイアブセマくの効

果条件がわからないな。もし王様の知識内で真なのか、この世界の知識内で真なのか。判断する方法はなかつた。とりあえず真偽判定

「判断が付きません」

答える」と、答えない」とがあるのは、わかつた。

גָּדוֹלָה

卷之三

巻之最大級の放意を尋

へ向かい、空氣の棘は一層俺を刺し抜こうとする。

『燃え盛る炎よ、空より出でし隕石よ合わさり、我が剣となれ、

ケオメテオリテイス！！

頭から流れ出るようにでてきた言葉。一瞬で魔法だと理解した。

部屋の上から炎に包まれた隕石が降ってくる。周囲にいた文官は彈くべきで、奇一郎は競合の頭の数は焼くべ

増えていき、地面についた瞬間に消える。弾けるような炎は床を焦がす二三なく、天井と床の間の空間だけを焦がしていく。

「！」

謎の悲鳴が数々上がる。人を殺すことに、俺は心を痛めたが、魔法という人外を使ったことにより、不思議とそれは和らいだ。

「彼女と付き合い始めたばかりの人間を、召喚するんじゃねえよ」俺は吐き捨てるように言つた。それを見、まだ死んでいない人々が俺を睨みつける。

「なぜつ、我のスキルが効かぬつ？」

王様は疑問の声を上げる。まだ死んでいないのか、と思い。

「《ミクロスフォティア》」

と、詠唱をする。俺の中の魔法力ゝマギアズイナミゝから小さき火がエネルギー体として出る。その火は誰にも触れないまま、王の心臓に近づき……弾けた。

「なつ！」

王の断末魔の叫びが部屋の中に響く。

「さようなら、愚しき王様ゝイリスイオヴァスイリヤスゝ」

そう俺は呟いた。辺りを見渡す。先程の巨乳美少女、エルフが見えた。

「どうだい？ 気分は」

俺は聞いた。

「なぜつ、こんなことをつ」

エルフは俺に聞いた。当然の疑問だろう。だが、

「質問に質問で答えるなつて、親に教わらなかつたのか？」

俺は相手の質問を無視する。エルフは今この状態で、死にそうだ。熱さのためか、顔を歪ませ、こちらを睨んでくる。

「こつちの質問に答える気はないのか」

先程の熱き隕石ゝケオメテオリティスクの出力を強くする。

「熱いつ！？ 热い！？！」

エルフが悲鳴を上げる。内容上俺の質問の答えに適した回答だ。

「そうか、」

俺は満足した。ついでに、先程の質問に応えようと思つた。

「俺がこんなことをやる理由？ 当然じゃないか。俺の未来を奪つた奴らへの、人外による復讐」エクズイキスイ「さ」
厨一的ワードを交えながら言つ。そんな回答している間に、人々の生体反応は限りなくゼロに近づく。屍と炎と岩の山。その中心に、俺は立つ。とりあえず、真贋判定アリスイアブセマムでこの部屋内の生存者の数を確認する。

「存在します」

「チツ！」

俺は舌打ちした。真贋判定アリスイアブセマムを使っても、生存者の数まではわからなかつた。予想外に使い勝手が悪い。便利なのは事実だが。

「助けて……助けてください……」

エルフが、俺に命乞いをする。目障りだな。と俺は思つ。先程王に放つた魔法と同じ魔法を放つ。

「《ミクロスフォティア》」

小さな火が、エルフの心臓を焼き焦がした。

「さてと、行くか」

俺は部屋を後にした。

二) 誤字や脱字があったら、報酬していただけないとありがたいです

三話、とうとう出て行く途中にした決意

王城……なのだろうか。先程のエルフが言うには帝国神殿、とう場所を俺は後にしようとした。だが存外、俺に立ち向かうものは多かった。神殿の王がいた部屋。そこから出たときには、俺は兵士らしき人に囲まれていた。

「面倒だな」

俺は一人つぶやいた。なぜ俺がこれほどの数を相手に殺し合いをしなければならないのか。いつそ、この国全体に復讐しようか。

「瞬だけ、考えたことだつた。だが、この国への復讐はこの世界への復讐へと、俺の頭の中で進化し、俺の心中へ波紋を広げる。」
「復讐」エクズイキスイくか……」

俺はさうじつぶやく。そうしている間に、も、

「えー、勇者！」

「おれも兵士が、俺に尋問しようとする。そんな尋問中にも俺の頭と心の中は、世界に復讐をするか復讐をしないかで、徹底的な討論を上げていた。

兵士長……だろうか？ 一人装備が充実して、厳格な雰囲気が微かに漂う偉そうな兵士。そいつが叫び声を上げながら、俺に向かつてきてた。両手にもつてているのは……剣。

「同じ魔法ばかりでもつまらないな」

俺は一言余裕げにつぶやく。頭と心の中に入っていた復讐の問題

発狂しているよつた勢い。それを持ちながら兵士長は俺に突撃していく。ただの兵士長が俺のような勇者様に勝てるわけがないだろうが。常識的に考えろよ。

「《地獄谷》」《ラスイキラザ》」

兵士長が奈落の谷へ落ちていく。いとも簡単に兵士長を落とされたことに、兵士たちは驚きを隠せないようだ。完全に逃げ腰な兵士までいる。

「つまらないな」

俺は一言つぶやいた。煎餅の様な硬いものを食べたいのに、プリンを出されたような気分だ。

「《大きな地獄谷》」《メガロス》《ラスイキラザ》」

兵士たちの多くを、奈落の谷が襲う。見たこともないような大きな呪文。見たこともないような効果の呪文。見たこともないようなニンゲンの呪文。それが兵士を襲う。兵士たちは抵抗することもできずに、殆どが奈落へ落ちた。地下三十メートルくらいだろうか。俺は勝手に予測する。まあ、三十メートルに埋まっているなら、誰か未来の人が掘り出してくれるだろ？

残った兵士が、

「仲間の敵！！！！！」

と言いながら、俺に剣を振るつ。

「《堅き楯》」《スクリロアスピーダ》」

謎の透明な楯。それが兵士を遮る。

「俺のせめてもの慈悲だ。お前くらい生かしとしてやるよ

俺は完全な勝者の笑みを浮かべながら、兵士に言い放つた。

「覚えとけ、俺は世界を壊す勇者」《カタストロフィプロタゴニステ》
イスくだ」

そう言い放つて、俺は部屋の前を後にした。

清涼な風。それが俺を包んだ。CO₂が少ない。現代の汚染された風とは違った風だった。

「清々しいな」

俺は無意識下で、呟いていた。清々しいと言つても、帝国神殿の兵士を何百人単位で殺し、王を殺し、文官を殺し、エルフを殺して

きた後だ。血の匂いは自分自身と背後から漂っている。前から来る世界の息吹。後ろと自分から漂う世界の末路。二つの匂いを浴びて、

俺は決意を固めた。

俺は、世界を壊すんだ。

どうだつていいじゃないか。俺が生まれて初めて彼女ができる、人生が最高にハイだつた翌日。無理矢理誘拐された世界。いうなれば、この世界は誘拐犯の家だ。誘拐から脱走したが、誘拐犯の家にはとらわれた。ならば壊そう。この家という名の世界を……壊すんだ。

四話、街を探索しようとしたら見つけたものとは…?

神殿の敷地を抜けると、そこには街が広がっていた。活気があり、人々が群れる街。どの店でも、店先の売り子が声を張り上げ、奥の店主が金の計算をする。カラソコロンと鈴の音が鳴ると、いらっしゃーいと声が響く。なんて活氣がある街なんだ。壊しておくにはもつたいない。

壊すけどね。

だが、壊すと言つてもすぐ壊すとか趣がない。この人々が阿鼻叫喚の色に彩られるのを一人眺めるのは楽しそうだ。だが、もつと楽しみ方はあるのではないだろうか？ 例を挙げよう。先ほどの神殿で、一番殺すのに燃えたのは誰だ？ 僕は自分の心の中に自問する。答え？ 決まつていい。あのエルフだ。ほぼ同位くらいで、王様も燃えたが、あれは俺をこの世界に召還した張本人だからで、この世界に俺を召還した張本人はすでに一人もいなくなっている。召還の魔法を唱えた者なら、まだいるだろうが、それは上からの命令に従つただけであつて、俺をこの世界に召還した張本人か？ と聞かれると、疑問符が浮かぶ。まあ、結論だけ述べると、殺したときに最大級の感慨というか感動を得られるのは、相手と親しかったとき。ということだ。かといって、親しきすぎると殺せなくなるな……と考えた。

「どうすっかー」

前途多難だ。世界を壊すにも、ただ壊すだけじゃ飽き飽きとする。なにかアクセントが欲しい。親しくなつてから殺すというのも、人間の感情ほど操るのが難しい物はないので、途中で世界を壊すのをやめにしようかな、と思つたら本末転倒だ。

そんな風に完全に殺人鬼な考えをしていると、街の中で、一つの店に目がいった。活気のある街の中、負のイメージを出し、鬱々とした空気が漂つていて。先程俺が味わった、血と肉という死の空氣

とはまた違つ、絶望の空氣だった。

「なんだ？ あれは」

勇者補正なのか、完全に文字は読みとれ会話はできるので、その店に目を凝らすが……微妙に遠くて見れない。歩いていけばいいな、と当然のことを考え、歩いた。そうして見えたのは……

「奴隸の店、エスクラボ」

奴隸店か。俺は興味を持った。一人で世界を壊す旅というのもおもしろそうだが、いろいろ不自由はあると思うし、一人の方がいろいろ楽しいだろう。三人以上だと、また違つたデメリットが出てくると思うので、一人旅くらいがちょうどいい。多分異世界補正で、奴隸も大体は可愛いだろう。今、ざっと街を見ても、特別顔がないような人はいないし。基本的に美女、美少女だ。多分奴隸も例外ではないだろう。やっぱ、旅の同伴をするなら美少女とか美女がいいよね！ というような低俗的な結論に、俺は至つた。

カラソコロソ。俺は店のドアを開けた。

奴隸は店先に並べられていた。大体全員可愛かった。美少女と呼んで差し支えがない。だが、アクセントとしては微妙だった。目に面白味がない。あるのは奴隸になつたという諦めか、奴隸になつても逃げてやるという反抗か。その一つだけだった。

「どれかお気に召した奴隸はおりましたか？」

店主が俺によつて来る。奴隸で一儲けしたそこら辺の成金だろう。

「微妙だな。他はいるか？」

微妙、という言葉が出た瞬間、店主は一瞬イラッとしたようだつた。だが、俺に購入の意欲があると見ると、一瞬で目の色を変え、商売人の目になつた。商売、…………！？

俺、金持つてねえや。

五話、異世界通貨なんて持っているわけないだろ、常識的に考えて

奴隸屋の店主と歩きながら、俺は焦っていた。金がない。それは酷く滑稽だった。例を挙げるとするならば、トライアスロンを走りきった後、お祝いにちょっと奮発しようと、イタリアンレストランに行つたら、財布を忘れたような気持ちだ。焦った俺を見かねたのか、

「どうかいたしましたか？」

奴隸屋の店主が聞いてくる。俺は非常に困った。

「すいません……ちょっと家にお金を忘れてしまいました……」
家に忘れたのはお金だけじゃないけどな。家族も思いでも、すべてを元の世界の家に置いた。

「大丈夫ですよ。今回は下見だけで、次回に買つていただくということでも、当店は全く問題ありません」

優しい店主だな、と思つたが、ここで帰しても店の信用問題だらう。一瞬で店主に対する態度を手のひら返ししながら、俺たちは歩いた。

ついた部屋の奴隸は、先ほどの部屋より、幾分か劣るような感じがした。顔だけ見るとなんら遜色がないように見える。なにが違うのだろうか。それは……空氣、言い換えると、雰囲気だった。

顔にあきらめの色がある。売り出し中ではないことを自覚し、売れ残りとして生活しているのだろう。売れ残りの行き先などろくなものではあるまい。

刹那、俺は何かが頭に入つてきた。それは、一人の少女だった。
顔は売り出し中の奴隸たちに勝るとも劣らない端整な顔立ちだった。元の世界にいれば、男の百人に九十七人が注目しただろ。そして、なんとも捨てがたいのが、この世界では思ったよりも少ない、貧乳……だった。

いや、俺が注目したのはそこではない。いや、貧乳とか、顔がいいとかそういう要素ももちろん大切だ。重要だ。必要だ。だが、その目に移っている色は、諦めを超えた……絶望だった。

「その娘が気に入ったのですか？」

店主が商売用の笑顔を浮かべながら聞いてくる。

「あ、まあな」

俺は曖昧な返事をする。

「その娘は上玉ですので、2万ギルですよ」

店主が言う。だが俺はこの世界に来てから一日も経っていない。寝床も探さないとだし、腹も減ってきた。

「そうか、明日にでも金を持ってきて買うとするよ」

金なんて強盗でもすればいいだろう。別に早く死ぬか遅く死ぬかの違いでしかない。だが、俺の言葉を聞いて絶望の目をしていた少女はこちらへ敵意を向けているようだ。睨んでいる。丁度いい。絶望している方が俺の計画への賛同は得られやすいだろう。そう思いながら、

「じゃあ、ありがとひこます店主さん。明日また伺いますね」

そう俺は言って、店を出た。

店を出たとき、俺はどうするか考えていた。なにより金がない。そうだ、魔法が使えるなら、試してみたいことがある。そう考えると、いつもたやすく頭の中で文字が踊った。

「《物質創造》イリゴズイミウルギアく」

頭の中を踊った文字を、俺は詠唱した。そうすると、

「おおおおおおおおおおお！」

なにもない空間から続々と一万円札が降ってきた。一万円？ この世界の通貨って円なの？ さつき奴隸屋の店主がギルとか言っていたよね。

俺は重要なことに気づいた。元の世界とこの異世界では、通貨が違う。そんなことにも気づけないと、俺は相当のバカか。激しく

自己嫌悪。まあ、仕方がない。とりあえずこの世界の通貨を探すか。

六話、果実店（前書き）

誤字脱字があつたら報告していただけると助かります

六話、果実店

果実店。ちょうどいいだらうと思つた。腹も減つた。やっぱ飯屋か。悩むな。俺は商店街みたいなところを歩きながら悩んでいた。時間は夕食時。辺りは人の群れ。瓦版が騒いでいる。王様殺害？俺が殺したじやん。

とりあえず、果実店に入った。夕飯時の飯屋で、個人的に頼みごとつて、余程度胸がないとできないよな。

「すいません。お金見せてもらいますか？」

入つてすぐ、ノリで聞いてみたが、どう考へても不審人物だらう。店に入つてきていきなり金があるか聞く客。客観的に見れば強盗だ。金は見せてもらつたほうが奪いやすいしね。

「なんですか？」

完全に疑つているよ。当然だな。俺だつて同じような人がいたら疑う。当然だ。どうやって金を見せてもらおつか。でも、異世界から来たなんて言えれば、黄色い救急車を呼ばれてしまう。

「ちょっと、田舎の村から来てね。この街のお金のことを知らないんだ」

異世界に来たらとりあえず、田舎の村を出せばいいって誰かが言った！ 誰だつけ？ 細かいことは気にしちゃダメだね。

「街に入る時の入街税はどうしたんですか？」

意外と頭がいいぞ！ こいつ！ ぱつと見俺と同一年くらいなのに、的確な対処をしてくる！ ほかの小説の主人公たちはどうやって乗り切つたんだ！ 俺には無理そうだ！

「いやあ、不法入街？」

とりあえず疑問形で言つとけば……

「おまわりさーん、こいつでーす」

「ちよつ！……！」

意外とひどいやつだな。

「ハハハ、軽いジョークだつて、ジョークジョーク」
冷や汗をかきながら、俺は言った。くつ、金を見る方法が思い浮かばない。

「ジョークですか、そうですか

何かを納得している。わけわかんねー。

「わかつたよ！？ 俺がここから去ればいいんだな！？」

俺は自棄になつて言つ。

「いえ、お野菜や、果物を買つてくれると、ありがとうございます」「買うのか……金がねーや。までよ。田の前のこいつは女。女が好きなもの……宝石か！ 宝石でも『えれば、金くら』い少しくれるんじゃね！？」

「ちよつと待つてろよ」

田の前の女が怪訝な顔をするが、俺は気にしない。店を少し離れ、路地裏に入る。暗い雰囲気のところ。俺はそこで詠唱をした。

「《物質想像》イリコズイミウルギア」

母親の部屋にあつた、ルビーを想像しながら詠唱する。少しすると、空からルビーが降ってきた。

「おつとおー？」

危ない危ない。ルビーを落とすところだった。なんとか、手中にルビーを納めたので、さつきの店に戻る。

「この宝石と、金を交換してくれ……」

俺は懇願するように言つた。

「それなら、宝石商の店にでも行つてください」

そうだね。果実を売る場所で宝石が売れるわけないね。仕方なく、俺は果実店を出て、宝石商の店に向かつた。冷静に考えると、どんなお使いクエストだよつて、思った。

十 誤字・脱字店（前書き）

誤字や脱字があったら報告していただければ、ありがとうございます。

宝石屋。見事な装飾に彩られていた。すげえな。金持ちだな。と、金がない俺は当たり前のことを考える。手には先ほどようさらに増やしたルビー。合計4つほど。なぜ4つにしたのかは……疲れたからだな。普遍的なRPGと同じように、魔法を使うと、MPが減るらしい。といつても、大型っぽい熱き隕石→ケオメテオリティスクを十分ちょい使っていても、全く疲れなかつたのだから、思ったよりMPは高いのだろう。いまでも少ししか疲れていないし。俺って結構チートだな。

宝石商の店に入った。カラソロロソ。ビリの店の鐘の音だな、と、たわいもないことを考える。

「誰だね、こんな時間に」

宝石商だと思われる、太った中年男が俺に言ひ。冷静に考えればもう19時くらいだった。日は落ちていて、ランプの明かりだけが店を照らしていた。

「少し宝石を買い取つてもらいいたくて」

俺は正直に言つた。ルビーを出す。

「できれば明日にしてくれ……と言つたこところだが、こんな時間にくるんだ。余程金に困つているんだろう。少々値が下がるが、即決で宝石を買い取つても良い」

上から目線だなあ、と俺は思つ。だが、細かいことを気にしてはだめだ。俺は手に持つていた4つの宝石を、中年男に渡した。

「これか……」

なにも言わず渡したのを肯定と受け取つたのだろう。中年男は唸りながら宝石を鑑定していくよつた。

「ちょっと待つてくれよ……」

なんだろう、中年男が俺を制した。

「結構な上物らしい、魔法で鑑定するが、かまわないかね?」

魔法で鑑定できるのか。この世界は便利だな。その魔法を見れば、俺もその魔法が使える気がした。なんだろうか、俺に使えない魔法はない、そんな気がしたのだ。

「ああ、いいぜ」

俺のナルシスト的思考はおいておき、肯定した。魔法という便利なものがあるんだ。使わなくては損だ。使つたつて、俺に損があるわけじやあるまい。

「ありがとよ。最近は魔法嫌いが増えてねえ。魔法を使うことで下がる買い取り価格なんて微々たるものだし、魔法を使わないところも安心して買い取ることができなくてねえ」

魔法嫌い？ 魔法が使えない人たちか？ と、俺は一瞬疑問に思つたが、魔法を使うのにも金を取るのだ。そう、考えると魔法も使える人と使えない人がいるのだろう。そして、今から使う魔法は店主さんにとつて非常に信頼を置いている魔法だということもわかつた。

「『宝石鑑定』ポリティミ・リソスアリスイアく』」

少しの静寂が入り、詠唱が終わる。宝石商は頭の中の情報を探るような素振りを見せた。すぐに探り終わつたらしいが、探すような顔が終わつた瞬間驚いたような顔をして、

「これはかなりのものだね！ 非常に純粹な宝石だよ！」

興奮するように店主は言つたが、宝石のことをいわれても全くわからない。続いて価格でも言つてくれるのだろう、俺は少し待つた。

「四つで4万ギル位かな…… 安く見積もつても」

安く見積もつた宝石二つで人が一人！？ 俺は衝撃を隠せなかつた。驚いた表情になつたのを、店主が見て、

「驚くことはない。これはそれほどの価値がある宝石だ。僕が保証する」

太鼓判を押してくれた。個人的には魔法でチートっぽくだした宝石でここまで稼げるなど完全な予想外だつた。

「売ります！！！」

俺が声を裏返しながらつい呟くのと、ちょうど時間はこらなかつた。

八話、美食（前書き）

誤字脱字があつたら報告していただけるとありがたいです

喧嘩。騒がしさで彩られているのは、飲食店……だった。飲食店といつても何が出るのかはわからない。ファミレスとも少し違う、謎の雰囲気を持つ店だった。繁盛はしていた。

「なんだ……これ……？」

俺は思わずつぶやいていた。本当になんなんだろうか。これは食べ物なのか？

俺は、旅をするにはモンスターの肉くらい食べれるようにならないうとな、と思った。そこでモンスターっぽいネオウルフの焼き肉定食を頼んだわけだ。それを頼んだときから周りの俺への視線が強くなつた。なんだろう、勇者を見る目になつた気がする。俺、そういうえば勇者だな。

とりあえず田の前にある油でギトギトして、尚且つ無駄に焦げているこの肉、それにレタス、米。それを平らげなければいけない。肉からは不穏な空氣しか感じ取れない。食べ物だとは思えない。

一口、俺は口にした。

至福

なんなんんだろうか、言葉に形容できないような美味しさを、この肉は俺の中ではなっていた。俺がこの肉を食べて幸せそうにしたのを見て、ほかの客は驚愕と感嘆の感情を露わにした。

「よく、あんなものを食べられたな……」

なんて声まで聞こえる。だが、これは、どうしようもなく血いのだ。形容しがたいほどに血いのだ。俺は訳が分からなくなる思いのまま、ご飯をおかず、この肉を口に入れた、この美味しさを理解できないとは……ああ、いきる喜びの三分の一を失っているぞ。俺はそう思った。

冷静になつてみると、何で俺は異世界に来てまでグルメ番組みたいなことを（脳内で）やつているんだろうと考へた。旨かつたのが悪い。責任転嫁をした。食べ終わつたので、勘定を払い、「こちそろさまと言つてから店を出る。俺に吹くのは少し寒い風。夜が来たことがわかつた。

思つたより宿屋には人がいた。たとえるなら夕食時の回転寿司のチーン店のレジ付近くの人が、宿屋の入り口近くにいた。繁盛しているなーと思いながら俺はレジみたいなところに行つた。

「一人部屋一つで」

まあ、一人だし。というか、隣に彼女連れてなくて悲しい。いるのに、彼女いるのに。

「はい、わかりました。いつからですか？」

「今日からで」

「ああ～、すいません。今現在部屋が満室でして」

予約の客と勘違いしたのか。というか、こんだけ人がいるんだ、部屋が空いているならもつと少ないだろう。理由？ 俺にもわからん。

「ああ、わかりました」

俺は曖昧な返事を残し、宿屋を後にしようとした。いや、までよ、俺はレジに戻つた。

「この辺でほかの宿やつてありますかね？」

ちょっと同業者のこと聞くのは失礼だと思つたが、背に腹は代えられない。いや、背に寝床は代えられない？ わかんね。とりあえず、ベッドで寝たい。それだけだ。というか、この街を壊すとベッドで寝ることができなくなり、なおかつ野宿か。悲しいな。

「はい、向こうの宿屋へシェルシェールなんかがお勧めですよ。うちよりかなりお高くなりますが、サービスは整っています。あそこのサービスに追いつけ追い越せが、うちの目標なんですね」

無駄な宿屋情報を俺に与えてどうじうと？まあ、いい、感謝はしておこう。

「ありがとう」

俺はそれだけ言つと、宿屋をでた。次の宿屋では（かなり高かつたが）部屋を借りれ、寝床の確保に成功した。こうして、俺の異世界での一日目は、幕を閉じた。

九話、購入（前書き）

誤字や脱字があつたら報告していただけるとありがたいです。

一日目。この世界の日付つて元の世界とどう違うんだろうなーと、二日目と思つた瞬間に考えた。朝。窓から降り注ぐ日差しは、元の世界とは、何も変わらなかつた。

「朝か……」

誰もいない部屋で、俺は一人つぶやいた。こんな時だからこそ思う、朝早く起きる習性がついていてよかつたと、休日で昼まで寝てるような人間は、この世界では生活できないのかもしない。野宿で襲われて死亡とか、誰でも嫌だ。

「どうするか……」

やることは何も決まってなかつた。そうだ、奴隸を買おう。前日から決まってた。朝起きたばっかで頭がはつきりしてないせいかもしれない。そういえば、奴隸一人一万ギルって安いのだろうか……と、一瞬考える。そういえば、この世界の一万ギルって、元の世界のいくらだ？　と、俺は考えてみた。まず、昨日の飲食店だ。焼肉定食は、八十ギルくらいだつた気がする。元の世界では、多分800円くらいだろう。宝石が一つ一万ギルというのは……元の世界で10万か、結構いいものだつたんだなーって俺は思った。

え？　までよ。そうすると、人間の価値つて、二十万円！？

高いのか安いのかは俺には全くわからなかつた。いや、それは元の世界で人身売買なんて、やってないからわからなかつた。まあ、やつていたらどこの悪の組織の一員だ！？　みたいなノリになつてただろう。やつてないし。

二十万円という価値について、俺は何も感想を持たないことに決めた。こんなことなら中学の公民の資料集に載つっていた某隣国の人身売買のところでも、しつかり見ておくんだな、と思つた。というか、ここで人身売買や人の価格、その他もろもろについて思考しても、仕方がない。俺はあさの色々な準備をして、部屋を出た。

朝特有の清々しい風が吹いていた。少し伸びをする。せつねいえ、
服も買わないとな、と、思つ。少し旅の準備をしてからじやないと、
この街は、

壊せないよな。

なんでもない日常の一部。俺はそう思った。もう引き返せないと
こうにいるのかもしれない。今まで殺したのは何人だろうか？ 唐
突に思い至る。まだ三桁はいってないよなー、と、特に何でもない
ように思つた。

「さて、行くか」

俺は一言そうつぶやくと、奴隸屋に向かつて歩き出した。昨日の
絶望の少女を買いに行こう。なぜだかはわからないが、俺はとても
胸が高鳴っていた。

カラソンコロン。奴隸屋の扉の音が鳴り響く。

「こりっしゃーー」

条件反射的に発された、店主の声が響く。

「おう、あんたかいな」

昨日あつたからだろう、多少親睦性は増えていた。

「おう、昨日の少女はまだいるかい？」

俺は聞いた。

「ああ、居るよ」

店主はそう答えた。まだいるのか、よかつた。俺は瞬間的にそう
思つた。だがなぜ、俺はあの少女にここまで惹かれているのだろう
か？ そんなことを考えた。だが、すぐにその考えを改め、そんな
ことはどうでもいいじゃないか。強いてあげるならば、貧乳だから、
ついでに絶望の皿。それでいいじゃないか。結論を出した。問題な
い。

俺と店主は昨日と同じように、歩いた。カタカタカタ。地下へ降

りる、階段の音が聞こえる。奴隸といえば、地下だろう。なぜだかはわからないが、俺はそう思つた。

辺りを見渡す。見つけた。昨日の少女だ。絶望の色は……薄れた？ 薄れた。俺はその少女の絶望の色が薄れたことを、認識した。だが、なお強い絶望の色。吸い込まれそうな瞳。俺は、その少女に夢中になつてた。まあ、貧乳だからだよな。一人納得した。

「彼女でいいのかい？」

店主が俺に聞いてきた。

「ああ。問題ない」

俺は答えた。

「そうかい」

そう店主が言つと、少女の行動範囲を圧倒的に狭めている檻の鍵を外し始めた。少し経ち、

ガチャツ

檻は開いた。少女は世界に出た。閉鎖された空間を……脱出した。

「奴隸の服従魔法はどうするかい？」

店主は聞いてきた。なぜだらうか。自分でできる気がした。

「自分でやるんでいいです」

そう俺が言つと、

「そうかい、」

店主は答えた。少し物珍しそうな目をして、

「じゃあ、勘定をお願いしますね」

俺はがさごさとカバンの中から袋を出した。なかには金貨が入っていた。多分金貨一つで一万ギル。銀貨は百ギル、銅貨は一ギル。昨日の宝石商や飲食店の経験で、俺はそう、予想を立てた。

「これだ」

俺は無愛想に答え、金貨を一枚渡した。

「こっちに来い」

俺は少女に、そう言い、少女と一緒に奴隸屋から出ていった。

十話、奴隸と余話（前書き）

誤字や脱字があったら、報告していただけないとありがたいです。

十話、奴隸と会話

さて困った。この少女と奴隸屋を出てきたんだが、ゆつくり話す場所が何処にもない。歩き回つてもこの子は逃げそつだから手を離せられないし。

そうだ！ 奴隸にする魔法がどーたらーたらって、奴隸屋の店主が言つていたな。どんな魔法なんだろつか？ と、考えた。瞬間。頭の中に文字が踊つた。

「『奴隸契約』スクラヴォススインヴォレオ』」

踊つた文字を流暢な口調で話す。する、と横の少女がビクッとながら待つた。

「どうした？」

俺は聞いた。頑固なのかこの少女は、俺に買われてから一度も喋つていない。強情だなあと思いながら、俺はこの子が喋るのを歩きながら待つた。

だが、十数秒経つても喋りそうもない。少しくらい脅すか。

「【言つてくれよ、お願ひだからさ】」

何、だらうか、言葉に強い力が込められた気がする。まあいか、どうせ話さないだらう、と思つたが、

「奴隸契約をされた気がします……もしそれでいたら、もうお嫁にいけません……」

少女が喋つた！？ 頑固な少女が何故喋つたのか、俺にはわからなかつた。少女自身も

「え……？」

と言いながら、怪訝な顔をしている。力を込めて聞けばいいのか
？ 俺はそう思つた。

「【奴隸契約つてなんなの？】」

俺は聞いた。また力が込められている気がした。

「私の知つている知識では、奴隸が主人に逆らわないようにするた

めの魔法だと聞いています。たとえば主人が命令を出したら、できる範囲で絶対服従だとか……」

「そうか、いいことを聞いたぞ。

「なるほど……」「

俺はつぶやいた。たぶんさつきの一いつの言葉には、俺の『命令』が含まれていたんだろう。だから俺の質問に拒否することができなかつたんだ。俺は納得した。

「【私はご主人様の従順なる犬ですって言つてみて】」

「私はご主人様の従順なる犬です」

言つた後少女は、はつ……!? とした顔になつて、それから顔を赤らめた。これは面白いぞ、と俺は思った。

「ふつうに受け答えしてくれる?」

命令を入れないで言つてみた。

「仕方ないですね……」

微妙に反抗的な態度だが、これ以上刃向かつてもなにをされるかわからないと思つたのだろう。普通に答えてくれた。

「じゃあとりあえず……どつかで君の生い立ちとかいろいろと、俺の生い立ち……はいらないな。どんな存在かと、目的を話そつ

そう俺が言い、

「【着いてこい……後ついでに、俺から離れるな。大体……まあ、少し探せばわかるくらいの距離な】」

そう俺が言うと。

「仕方ないですね……わかりました」

渋々頷いた。

「じゃつ、どつか……公園でも行くか!」

そう言つて、俺は走り出した。仕方なしといった感じで、少女は着いてきた。

十一話、服とか

まあ、金は後一万五千ギル以上あるし、問題ないだらう、と思つた俺は、奴隸と一緒に微妙に高そうな飯屋を探した。だが、高そうな店はなかつた。普通に考え、王族や貴族はお抱えのコックが居るんだろうな」と、納得した。

「どこで話す？」

俺は観念して聞いた。いや、三十分くらい歩くのに疲れた。段々と奴隸少女が不機嫌になつてくるのが手に取るよつに分かつたので、仕方なしに聞いた。

「私はこの街を回つたことはありません……ですが、普通の人人がご飯を食べながら話せるようなところなら三十分回つている間に五間ほど見つけました」

「すげーな。うん。

「よし！ そこで一番雰囲気がよせそつなところに行こう！」

「どこに失言があつたのだろうか、この発言をした直後、少女は途端に不機嫌になつた。

「常識的に考えて、奴隸屋の奴隸っぽい服で入れる食べ物屋さんがあつたら、私が聞きたいですね」

「服屋に行くか……」

俺が観念したようにつぶやくと、少女はとたんに機嫌が良くなり、「はい、わかりました！」

と、スキップしながら言つてきた。俺の財布大丈夫かな……

服屋についた。少女は嬉々として入つていく。

「お前はこないのでですか？」

「俺は服屋は苦手だからいいよ。ついでに俺のも買つておいてくれ。ネタで買つてきたらおしおきするわ。てか、お前つて言つた」「わかりました。鬼畜くんつて呼びますね」

「もつとだめだ。ご主人様と言え」

目の前の少女がえーみたいな顔をする。

「名前で呼んじゃダメですか？」

「ダメだ。名前は下の世界に封印すると、昨日の夜に決めたんだ」「目の前の少女がこの人頭大丈夫か？　みたいな目をする。当然だろう。

「俺の事情は後で話す。ご主人様が嫌なら勇者様とでも呼べ。あのエルフも俺のことは勇者って呼んでいたしな」

「どっちでも変わらなくないですか？」

俺は諦めた。いいじゃん。奴隸にご主人様って言わせて何が悪い。

「ほらよ」

だが、これ以上の説得は無意味だと俺は思い、とりあえず銀貨を2枚渡した。

「銀貨一枚あれば一人分でそれなりのいいもんが買えるだろ。お前が150ギルくらい使っていいぞ。俺の分は50ギル位で、全身分三日分くらい頼むわ」

名前のことは諦めたのか、目の前の少女は満面の笑顔で、

「はい、わかりましたっ」

そう言って、服屋に入つていった。そして俺は、

「服屋つて苦手なんだよな

ひとりつぶやいた。

數十分。いや、一時間弱が経った。手持ち無沙汰になつて待ち続けていた俺も、そろそろ待ちきれなくなつた頃だった。

「どうですか？　ご主人様」

美少女が服屋から出てきた。全体的にピンクでまとめられた服は、可憐なお嬢様を彷彿した。

「可愛いな」

俺は正直に答えた。

「うーん。女の子を褒めるならもう少し考え方があると思いますよ

？」

ダメ出しがされた。

「可憐なお嬢様みたいだ」「正直に答えたパート2。

「ありがとうございます」

お気に召したのか顔が綻んだ。

「俺のは？」

簡潔に俺は聞いた。いや、複雑に聞くのも難しいけどね。「これです」

そう言うと、田の前の美少女は俺に持つていい服を投げてきた。やまなりの軌道を描いた服は、俺の手元に入る。それを俺は見て、「結構いいな」

一人呟いた。それが田の前の美少女にも伝わったのか、

「ありがとうございます」

感謝された。

「いや、お世辞じゃないんだから、お礼を言つのは俺の方だ。ありがとな

そう俺は付けたした。

「いえいえ

照れくさそうに田の前の美少女は言つ。

「では、話せるところに行きましょうか」

そう美少女が言つと、俺たちは歩きだした。

十一話、名前や過去

俺らは服屋から出て、ずっと歩いていた。目の前の美少女が機嫌よく俺を先導する。

目の前に建物が現れた。俺はそれを見て、洒落ているなと思った。

「ここです！」

目の前の美少女の機嫌が一層良くなる。

「なにが？」

いきなりここですって言われても困る。俺は聞き返した。すると美少女はむつとした目になり、

「食べ物屋ですよ。雰囲気的にわかりませんか？」

異世界人だからわかりません。と答えようと思ったが、そんなこといきなり言われて信じるか？ と聞かれたら俺だって信じまい。とりあえずやめておいた。

「ソウダネーココハスゴクタベモノヤッポイネー」

棒読みで答えた。

「そうですよ。じゃあ、入ります？」

まあ、入るだろう。ほかならぬ美少女@俺の奴隸の薦めだ。入らないわけにもいくまい。俺たちは、食べ物屋に入った。

さて、食べ物屋。名前はミルド食堂と言つりしい。に入った。

「じゃあ、とりあえず食べ物でも頼みますか」

俺は言った。

「そうですね。食べ物を待っている間とかは、意外と話がはかどりそうですし……」

そういうながら、メニューを見る。普通に定食でいいな。鳥の丸焼き定食……丸焼きは苦手だ。焼き肉定食は似たものを昨日食ったしな……焼き魚定食はほかと比べてお値段がかなり高い。俺はそんな感じでうんうんと唸っていた。それを目の前の美少女がみると、

「早く決めてください。いくら何でも遅すぎます」

「5分くらいかけて決めない？まだ一分ちょっとだよ？」

「もう少し悩ませてくれ……」

まあ、バカ正直に言うのもばかられてる。適当に逃げの一 手を

打つておこう。

「そうですか……」

嫌々ながらも納得したようだ。

さすがにそれ以上待たせると、不機嫌まつしげらになつてしまつので、その後一分くらいで、干物定食にする事に決めた。

「遅いです……」

早い方なんだけどな。まあ、このまま飯を決める話題で、会話のイニシアチブを向こうに握られる事もあるまい。俺は話を転換することにした。

「それで、とりあえず……なにからほなそつか……」

シリアルスッぽく俺が話せばイニシアチブは握れるだろう…

「そういえば、ご主人様、私の名前って知つてましたっけ？」

「…………」

知らなくね？ あれそういうばこの田の前の美少女@俺の奴隸の名前を知らなくね！？

「…………ソラです」

「ソラか……いい名前だな」

本心からそう思つた。ソラ…………いい名前じゃないか。

「まあ、本題に入ろう。俺は勇者だ」

「…………」

静寂。一瞬で極寒の北極に連れ去られたような静けさと冷たさ。

俺が言葉を発した瞬間、それが俺の周りを包んだ。

「頭……大丈夫ですか？」

いや、事実だし……

「なにを見せれば信じてもいいれる?」

「王様からもらっているはずの勇者の証へイロアスペリオリズモスくですね。歴代の勇者を載せていく歴史書や、勇者の自伝には、確実に勇者の証について記されていました。『主人様が勇者なら、それを持っているはずです』

言葉に詰まつた。もはつてないや、そんなもん。貰つ前に殺しちまつたし。どうしようか。困つた。

「…………本当に勇者なんですか?」

正直に言おうか、俺は迷つた。まあ、いつかは知らせないとしないことだ。今言つても何ら問題はあるまい。

「俺が王様を殺した」

「…………」

静寂第一号。いや、本当だよ。さらなる冷たさが俺を包んで蝕もうとしてくるけど、俺は潔白だ! 王様殺しつて、罪になりますね。潔白じやないです。すいません。

「本当だ。勇者の証を貰つ前に王様を殺したから、俺は勇者であるが、勇者の証を持つていない」

「…………本当?」

「本当だ」

おれつて正直ものだな。ここまで正直に全てを明かせるなんて。なんていい人なんだ。王様殺しだけど。

「まあ、仮に、仮にですよ? 『主人様が王様を殺したと仮定しましょう。本当に仮にです。何でそんなことを?』

まあ、当然の疑問だな。誰だつて考える。

「世界を…………壊したいんだ」

「はー?」

「俺は、俺を勇者として召還したこの世界が憎い。俺を魔王討伐の

手先としか見ていないこの世界が憎い。元の世界での幸せを奪つたこの世界が憎い。だから壊す。あーゆーおつけい？」

「…………」

ソラは絶句していた。

「おい、大丈夫か？」

「本当に……頭大丈夫ですか？」

「ああ、なにも問題はない。一週間くらい旅の準備を整えたら、この街も壊すつもりだ」

「この聖職者の街、イエレアスを壊すんですか？」

「この街、イエレアスって言うんだ。初めて知ったな。

「勿論だ。そのためにはどんな障害もはねねのけてみせる。魔法使いだろうが、騎士だろうが、軍隊だろうが、国そのものだろうが、魔王だろうが、何だって俺の敵だ。この世界の全てのものを俺は敵として受け入れる」

「私は？」

すんなりと、空いた心に入つてくるよつこ、ソラは言った。

「敵さ、だがよ、旅は道連れ世は情けつて言つだろ？一緒に旅をする人が一人は欲しいんだ。俺がおまえ以外の全てを壊すまでは、俺はおまえを壊さずに、味方となる」

「そうですか…………」

沈痛な雰囲気が広がる。先に口を開き、言葉を発したのはソラだった。

「私、彼氏がいたんですよ」

なぜそんな話につながるのか俺は疑問を一瞬持つた。

「奴隸に売られる……一週間前くらいですかね。彼氏に結婚しようつて言われたんですね。私はこれでも、村長の娘だつたんで、勝手な結婚をする事はできなかつたんです」

俺はなぜだかわからないが、うなずいた。いや、頷かなければいけないと思った。生き方を、肯定しなければ……

「駆け落ちをしようつ……そう彼との間に約束をしたんですけどね、

何処から情報が漏れたのか、もしくは、ただの運命のいたずらだったのかはわかりません……ですけどね、」

次にでてくる言葉が、怖くなつた。なぜだろつか……

「駆け落ちの前田…… 村の財政を救うとかで、奴隸に売られちゃつたんですよ……」

唇を噛みしめるよつこ、彼女は言つた。一筋の涙が、俺の頬を通過した。ソラの田にも、水が……溜まつてゐる。

「なんでつ、ご主人様が泣くんですかつ……？」

「俺は……おまえと同じ……いや、すゞく似ているんだよ……」

一瞬困惑した顔になるソラを無視し、俺は続きの言葉を紡ぐ。

「話すよ、召還前夜を……」

十三話、過去や現在

過去。

「俺はおまえが好きだっ！……！」

精一杯の告白。目の前にいる彼女はどう受け止めるのか、俺はそれでかなり悩んだ。今まで、告白するかしないかでかなりの悶々とした日々を過ごしていた。数秒。俺が感じるにはあまりにも長い時間だが、現実として現れるのはたかだか数秒という時間だけだった。

「はい……」

俺は一瞬頭の中が真っ白になった。が、すぐさまそれを肯定として受け取るのを頭の中が拒否し、疑問のかと勘ぐるようになった。どれだけ矮小な男なのだろうか、俺は。ただ何もすることもなく、無言の時は数秒として現れ……

「これからも言わせてください。付き合いましょう。　君　」

今度は先ほどよりもながく、俺は思考の狭間に取り込まれていたと思う。何がこれほど頭の中を働かせるのか。俺にはわかった。ただ単に、うれしいのだ。先ほどの矮小な自分も、うれしかったの裏返しながらうつとうつやへ氣づく。うれしこと幸福が俺の頭の中を支配した。

「ありがとう……」

俺は一筋の水を頬に伝わらせながら言った。

「泣くことはないじゃないですか」

彼女は笑いながら言つ。俺の心はそれだけで満たされた。こうして俺と朱里は、彼氏彼女の関係となつた……

次の日はもう会えぬ関係になつたんだ。すべての過去を彼女の元に置き去りにして。

現在。異世界。

「こんな幸福の直ぐ後に転成だ。神様のお召しだとしても、これほど酷いことはないだろ?」

俺は言つた。俺は天意的に、彼女は人為的に、最愛の人との別れを余儀なくされたのだつた。悲しさ。無氣力感。それが俺を包んだ。目の前のソラにもそれが伝わつたのだろう。絶望の日は、黒き輝きを持つていた。

「天意によつて転移……プツ」

おい、俺は今こいつを殺していいよな? 黒き日に絶望は俺をおちよくる前触れかよ。唐突なソラの発言に、俺の怒りは頂点に達しそうだつた。

「ああ……すいません。つい
「ついじゃねえよ!」

俺は思わず突っ込んでいた。どんだけ人間味がないのだろうか。確かに過去の栄光にだけ浸つていた俺も悪いと思うよ。悪いけどさ

「まあ、それでこの異世界を壊したいと……わかりました」

俺の崇高なる目的がわかつたのだ、俺はそう考えた。

「私も、それに荷担しましょ
「は!?」

飲食店内に、俺の声が響いた。

「おまえ……戦闘できるのか?」

「あつ……」

あつじやねえよ、どうやって世界を壊すんだよ。

「まあ、世界を壊す人のサポートへいらこならできますよ」

「まあ、それもそつか」

事実、俺は一人旅が悲しいからといつ理由でソラを買つたわけだ
しな。旅のサポートをしてもらうのは当然だと考えた。そして……

「『真贋判定』アリスイアブセマ』」

そうは考えたが、俺は彼女に全幅の信頼を置いているわけではな
かつた。そして、本当にこの少女には、先ほどのよつな過去がある
のか？ と疑問に思った。

「え？」

ソラは訳が分からぬような顔をする。

「真です」

本当……か。人の心を見透かしているみたいで嫌になるな。殺す
相手じゃなく、今から旅する相手というのが、何とも気が引ける要
因になつていて。本当……か。

「ちょっと、おまえの言葉が本当かを試したんだよ」

「そうですか、まあ、疑われるのは当然ですね、それくらい許し
ますよ」

「一応、立場が上なのは俺だぞ？」

「そうですねー」

氣だるそうに彼女は言つ。

「はあ……」

俺はため息をついた。本当にこんな奴と一緒にこの先が大丈夫な
のかが不安になつたからだ。

「まあ、おまえがはじめからバカ正直に、自分の過去をはなしてく
れたのは感謝しているよ、ありがと」

俺の感謝の言葉に彼女は、

「どういたしまして」

と、照れくさうに答えるのだった。

十四話、予定とか水

結局俺たちは、今後の予定は適当に決めて、話が終わった。まあいいじゃないか。目の前のこいつが信頼できる奴だとわかった時点で、俺はもう満足しているんだ。ぶつちやけ、旅の知識とかのだしな。無駄に俺が口出ししても意味はない。

「それで……おまえ、旅するのに必要なものとかわかるか？」

「旅は村からこの街まで、奴隸として連れてこられただけなので、わかりません」

「わかんないのか。俺は落胆した。というか、それどころの話ではない。旅の心得を持つている人がいないとなると、俺たちはどうやって旅をしたらしいんだ？　俺には到底わかりそうもなかった。

「まあ、取り合えず馬と食料と水があればいいんじゃないですか？」

馬は必須じゃないですけど、できればほしいですね」

馬……か。買えるだけの金は作れる。だって、見たことも触ったこともあるから、物質創造→イリゴジイミウルギアくを使えば簡単だ。だが……

「おまえ、馬の乗り方とかわかるか？」

「わかるわけないじゃないですか」

俺たちの旅は前途多難らしい。

冷静に考えれば、俺の意に沿う生物を作ればいいんじゃないか、と思った。勇者だからそれくらいできるだろう、と思つた。だが、俺にもできることはあるらしい。そのことを考えて、頭の中に文字は踊らなかつた。

「どうすっかな……」

俺はまじめに考えた。今はソラと商店街を歩いている。王殺しの重罪人でも、顔を見られなければ大丈夫だということが、身を持つてわかつた。誰からも見られない。服装はこの世界っぽいものに変

えたしな。

「どうすればいいと思つ? 僕の魔法でも、意に沿つ動物を作るのは無理らしい」

「勇者様でも、そこまでは無理でしょ?」
ソラは呆れたようだつた。どうすればいいのかな、と俺が考へてみると、隣にいたソラが、水を得た魚のような顔……ソラの顔は魚っぽくないから例えとして不適切だな。のどに刺さつた骨がようやく取れたような、すがすがしい顔をして、興奮しながら俺に話しかけてきた。

「ご主人様! 意に沿う馬を作るんじゃなくて、馬を意に沿わせる魔法を使えばいいんじゃないですか! ?」

成る程。俺は素直にそう思つた。確かに一理ある。そう思つてそのことを頭の中で思案すると、文字が頭の中で踊つた。これで、旅の問題点はたぶんクリアだらう。馬に言うこと聞かせることができれば、快適な旅ができるに違ひない。きっと夜もぐっすり寝れ……

「おまえ、野宿の準備とかできるのか?」

「無理ですね」

やつぱり、俺たちの旅は前途多難なようだつた。というか、水の問題もクリアしてないな。水とか簡単に出せないかな、と思つてみると、文字が踊つた。

「《清き水》カサロネロ《》」

俺がそう唱えた瞬間、水が降つてきた。幸い、俺の頭の上に降つてくるようなイベントはなかつた。前に降つた。うん。そこまではいいんだ。只…………勢いが強すぎて、俺とソラに水がかかつたんだ……

ムスつとした顔で、俺を睨みつけてくる少女。服は水で濡れていて、清楚なお嬢様のような服が濡れていて……扇情的だ。果てしなくエロい。可愛らしい顔と、扇情的な服が、相反する効果……ギヤップをだして、とにかくエロい。そんな少女が、俺にらみつ

けていた。

「はは……はははははは……」

それに対しても、俺は乾いた笑みを浮かべることしかできなかつた。いや、それはそうだろう。エロいな！　と、公衆の面前で言えるわけもない。

「何か……言い残すことはありますか？」

ソラが脅すように聞いてくる。俺はすぐさま、

「（濡れた服を乾かしたり、濡れた体を暖める、風呂にはいるため）
ホテルに行きましょう！――！」

なぜだろうか、完全に怒りを有頂天にしたソラは、俺を殴つてきた。理不尽だ。旅の問題を解決したのに、理不尽だ。

十五話、ホジトドック風の食べ物とか

歩きながら横のソラを見ると、ムスッとした表情は崩していなかつた。

「いつまでキレイてるんだよ……」

一回宿屋に入つて、服を着替えた（ソラは俺たちの服を服屋で何枚か買つていた）。

夕食付きの宿屋だつたのだが、まだ夕食まで時間はあつた。なので、一緒に外で適当にぶらぶらしようとこうことになつた。結構時間が経つていてると思うのだが、ソラは不機嫌なままだ。

「キレイでなんかないですよ。場所や状況をなにも考えずに、勇者という特権で魔法を使うという、行為に異議を呈したいだけですよ。それを世間ではキレイといつて思つ。うん。おっ、前に……」

：屋台的なものが見えたな。

「あれでも食うか？」

：「いいかはわかんないが、屋台的なところなんだ。独特な味を放つているだろう。

「いいんですか？」

ソラは聞いてきた。

「ぜんぜんいいぜ。旅の仲間なんだから親睦を深めたいしな」
不機嫌もなおしたいしな、と続けたかつたが、我慢した。

「ありがとうございます」

ソラはお礼を俺に言つてきた。別に旅の仲間になる仲なんだから、そこまでかしこまらなくてもいいのにな。

「何で敬語なんだ？」

耐えきれず俺は聞いた。

「慣れますから」

間髪入れずにソラは答えた。よく聞かれるといった風だ。たぶん昔からずっと敬語なんだろ。

「そうか」

それ以上敬語について聞くことはなかつた。あんま意味ないしな。

「皿にな、これ」

屋台ででてきたのは、元の世界でいうホットドックのようなものだつた。ただ、味は少し淡泊な感じはした。

「そうですね……」

こちらに笑いかけ、うれしそうに彼女は答えた。まだ金はあるし、さつきの宿屋で、ちょっと複製しといた。まあ、こんな時くらい見栄を張つて、ソラに奢つたつていだらう。怒りをなだめるためでもあるけどね。

横を見ると、ソラはもつホットドック風の食べ物を食べ終わつた。俺よりも早いんだな、と思いながら、俺は口に付けていたホットドックを離し、

「もう一個食つか?」

一瞬だけ彼女は悩んだようだつた。だが、すぐに顔を煌めかせ、「はい!」

と答えてた。よく食べるな、と思いながら、俺はホットドック分の金を渡した。銅貨四十枚……多くね? 銅貨と銀貨の間の金がほしいと思つた俺だつた。十円玉で、四百円のものを買う人はいまい、そう思つた。そして、俺が銅貨をソラに渡した。瞬間、ソラは怪訝な目になつて、

「なんで、銅貨なんですか? 大銅貨を使えばいいのに……」

そんなものがあるのか、一瞬そつ思つたが、なら、銀貨を渡せば大銅貨が返つてくるよな、と思い、銅貨をソラから受け取つて、銀貨を渡した。

少し後、ソラはホットドック風の食べ物を一つ買つてた。

ホットドックを食べているソラを見て思つた。俺は何故こんなところでノンビリしているのだろうかと、世界を壊さなくてはいけない

いんじゃないのかと。

なぜ、俺は誘拐犯の家でくつろいでる？

俺は即刻この世界を壊したい。生きる糧を得たら、すぐにでも壊したい。だが、壊すための行動に、ホットドック風の食べ物を食べることは含まれているのだろうか、俺は疑問だった。

「どうしましたか？」

ソラが俺に聞いてきた。聞くほど考え込んだ表情をしていたらし
い。

「なんでもない、それで、大きめなバッグとか売っている場所はどこだ？」

探そう。生きる糧を。出来るだけ、早く探そう。壊したい。世界を。早く壊そうよ、世界を。

十六話、一週間の準備（前書き）

PV15000、ニーク3000越えありがとうござります。これもみなさんの応援のおかげです！
本当はPV一萬の時にやりたかったんですが、すっかり忘れていました。

十六話、一週間の準備

世界を壊すと再認識してから、約五日。俺は躍起になつて旅をするために必要なことと、この世界の状況などを調べあげた。犯罪者になりながら世界を巡るんだ。石橋を叩いておいた方がいいだろう。毎日、夜には酒場に入り浸つた。初めて飲んだ酒だが、魔法で強制的に酔わないようにした。情報を得るために酔つているようでは話にならない。結論として、ミルド帝国は、騎士派と神殿派が存在していた。

「そんなこと常識ではないんですか？」

酒場から帰つてきた後、情報の整理をしていたら、何故か起きてきたソラに言われた。

「俺は別の世界から来た人間だから、この世界の情勢とかには全くと言つていいくほど疎いんだよ」

ああ、と、ソラは納得したような顔をして、「じゃ、寝ますね」

そそくさとベッドに入つていった。少しは手伝おうとかないのかね。まあいや、俺は情報を纏めた。

帝国には、騎士派と神殿派が存在。

国王は神殿派

他の国とは、戦争をしているが膠着状態にあり、兵士も配備されではいるが、すぐにも戦おうという雰囲気ではない。ただし、国王が死んだので、それをみて向こうが攻めてくるかは不明。

魔物は、ここら一帯は比較的強い。他の国と比べて断然に強い。理由は、近くに魔王城があるかららしい。魔物に悩まされているから、俺を召還したのだと納得がいった。

この国では、国の兵士よりは、冒険者や傭兵の方が基本的に強い。ただし、冒険者や傭兵よりは、騎士の方が強い。

魔法を使える奴は意外と少ない。

結構な情報が集まつた。まあ、ここに使いつる情報はこの国
の状況だろ。神殿派のトップ相当である、国王が死んだので、騎
士派が仕掛けてくる可能性は大いにあるし、他の国、名前はピルド
連合や、ライル帝国だつたか、ふあ、攻めてくる可能性も捨てきれ
ない。さらに、魔王軍の攻撃が熾烈になることもある。

「この国つてかなり不安定だな……」

俺は、一人でそうつぶやいた。危険な爆弾をいくつももつてゐる。
しかも、それに対抗するのは、金で動く冒険者や傭兵たち。騎士は
数が少ないらしい。

「それで勇者を呼んだのか」

確かに勇者を屈服させる手だてがあれば、まず、魔物への脅威は
減る。しかも、その勇者がこの国を好いてくれ、騎士などに入つた
ら一騎当十の活躍をするだろ。

「ま、俺はこの国を壊すがな」

反撃される余地を勇者に残すなんて、甘いよな。と、俺は考へる。
速攻で拘束し、魔法に対する手だてをなくし、奴隸にすれば、完璧
だろひ。

「思考を呼んでいるよひで悪いんですけど、親族の合意がないと、奴
隸にはできないです。奴隸承認は、親族の前で、奴隸準備という
魔法を使つしかないです。結論から言つと、勇者は奴隸にできません。
また、勇者が國に逆らわない理由は王家の最大級機密となつて
いますが、今までの勇者系の文献を紐解いていくと、序盤は渋々つ
きあつていた風が多いそうですよ」

なんという、知識量。詳しそぎ。

「何でおまえはそんなんに詳しいんだ？」

「一時期首都で、勇者専攻の勉学を修めていたんですよ。村の金銭
的危機で、戻られましたけどね」

「そうか……」

ソラも昔から苦労しているといふことは感じていた。だが、まさと、元の世界の人々と、この世界の人々とでは、格差があります。こんな文明が低い世界で、高度な趣味と呼べるものもなく、ただいきる最低限度の稼ぎを得る生活など、俺には想像ができなかつた。

「この世界は……大変なんだな」

「この世界が大変なんじゃなくて、ご主人様の世界が楽すぎるんですよ。働かなくても生きていけるとか、どんなパラダイスですか。この世界では、六歳くらいでふつうに働いて、労働力にならなかつたら即奴隸ですからね」

「そうだな……」

こうして考えてみると、イージーモードの人生から、いきなりハードモードに難易度をあげられた気分だ。勇者補正だけでどこまでできるのか、俺にはわからない。力を理解していない。

「ご主人様は、勇者補正がある分乐じやないですか？」

「危うく魔王討伐の手先になるところだつたがな。上の命令で動きたくねーよ」

「上の命令は絶対ですよ？ ご主人様の世界のような平等を目指している人なんてどこにもいません。ただ、生きるには自分が働くか、他人に働くしかないんですよ。他人を働くのも乐じやありません」

「まあ、そんなことグチグチ言い合つても仕方ないだろう。それと、そろそろ旅の支度が整つてきたから、明後日あたりにでも、壊すぞ」「あい、わかりましたよ。私はどうします？」

「できれば壊すのに加担してもらいたいな。身体強化の魔法は使えるから、戦えると思つし」

「できれば殺したくありませんね。今まで人に殺したことはありませんし、抵抗はあります。まあ、この世界でこんな潔癖なことを言つてられるとは思いませんけどね。まあ、それでも私が戦う必要があつたときは、ご主人様が命令でもすればいいと思いますよ？」

そうすれば私は少し楽ですね。できればやつてほしくないですけど」

「わかつたよ。できるだけソラは殺しに加担させない」

「ありがとうございます。こんなことも言つていられないのはわかるんですけどね」

「まあ、仕方ないだろ。人間を殺すのに抵抗がない奴なんて、俺がみてみたいくらいだ。俺だって復讐という確固たる目的の上じやないと殺したくはないしな」

「人を殺す理由なんて、いりませんけどね」

そうした雑談で、夜は更けていった。

十七話、朝方の喧騒

喧騒。い、うなれば、阿鼻叫喚の凶。俺は悲鳴を聞いた。なんだろ

う、俺は寝ている体を起こし、意識を覚醒しようと試みた。が、昨日遅くまで起きていたのが響いていたのか、なかなか起きれない。

「くそつ、『朝の覚醒』プロイアファイブニスイク』」

魔法に頼り、俺は起きあがる。すべてを魔法に頼るような人間にはなりたくないのだが、何か騒がしいのに、一度寝をしようとも思わない。

起きた頭に、走る音、怒声、悲鳴。様々な音が鳴り響く。外の窓ガラスに手を向けると、土埃が立っていた。

「何だ？」

俺は疑問の声を上げた。横にいるソラはまだ眠っていた。

「起きろ、ソラ」

「ううう。、う~」

意識が完全に寝ている。軽くいつただけじゃ起きなさそうだ。

「ちっ、【起きろ、ソラ】」

ビクツ、ソラの体が跳ねた。

「ど、どうしましたかっ！？　なにがあつたんですか！？」

驚いたように大声を上げる。よくわからぬが、驚いているようだ。

「いや、いきなり頭の中から声が響いて、強制的に意識を起こされたんですよ」

奴隸魔法効果で起きろといつたら起きるとこを俺は学んだ。

便利だな、奴隸魔法。

「どうか、それで何で私を起こしたんですか？」

「ああ、外で喧騒が……」

ぎやあああー————

さらに強い悲鳴が響いた。

「どうした！？」

「なにがあつたんですか！？」

俺たち二人は部屋の外に飛び出した。

目の前で馬に乗った騎士が駆ける。槍を手に持ち、武器を持つている人間を片つ端から襲っている。

「なにが……起こっている……？」

俺は思わずつぶやいた。なぜ、騎士が武装している人を襲つているのか、俺は考えた。

「なんで、こんなことに……」

隣にいるソラも絶句している。俺だつてなぜこんなことになつているかなどわからない。騎士派がこの街を攻める理由は何なんだ？

「おい、そこの人だ！ サッさと逃げる！ 殺されるぞ！」

道にいる青年が俺に向かつて叫んでくる。人間が殺されているようだ。

「とりあえず……荷物持つてくるか」

一週間で買った旅のための荷物を置いていくのは避けたい。物質創造するにも、かなりの数があるので、疲労が来るはずだ。

「え、ご主人様！？」

宿屋のドアを開け、いきなり走つて入つた俺に、ソラが驚く。丈夫だ、すぐ持つてくる。そう俺は思いながら、荷物を取りに行つた。

幸い荷物は纏めておいたので、すぐに持ち出すことができた。そのとき、念のために武器屋で買っておいた、高級品の剣を持ち出す。なにやら、希代の名工が作った剣だと、二万ギルという、ソラと同じ値段だったが、何か武器がほしかったので、とりあえず買っておいた。

荷物を持ち、魔法の鞄にそれを入れる。魔法の鞄は自作だが、簡単にいうと四次元ポケットだ。何でも入る。因みに鮮度も落ちない。旅先で鮮度がいいものが食べられるのは重要だ。

階段を駆け降りた。ソラがいた。

「どうしますか、ご主人様！？」

呼ばれた。

「とりあえず荷物はだいたい持つてきた。一時的に透明化して、様子を見る。その後、膠着状態になるか、この争いつぼいのが終わつたところで、この街を壊す。そして、次の街へ。これでいいか？」

「たぶん大丈夫です」

ソラにもこの作戦でいけるのかどうか自信がないのだろう。正直俺にもない。だが、時間もないので、とりあえず透明になつておいて、状況を見たいのだ。

「じゃあ、やるぞ、『透明化』ズイアファニスアンスロボスく』」

俺とソラの存在をほかの人間には感知できないようにした。これで、襲われる心配はなくなるだろう。流れ弾には注意しないとだが。「とりあえず、どこに行く？ この状況をわかりそうな場所……」

「この街の分城だと思いますよ。神殿は、今はもうないですし、それを考えると、政治的観点で物事がわかる場所は城です。情報だけなら街を歩いている傭兵や冒険者に聞けばいいんですが、傭兵や冒険者がこんな状態で悠長に受け答えをするかというと、疑問ですね」「城に行つて、盗み聞きでもするか……」

そう俺が言うと、ソラは、

「城はこっちですよー『ご主人様が情報周している間、私だつてなにもしていられない訳じやありませんからね』」

「おお、結構いろいろと調べてるんだな、と、俺は思つたが、

「街のおいしい食べ物屋を探すため、この街の隅から隅まで調べあげましたからね」

「前言撤回。俺が与えた金を使い潰しているだけだった。」

「まあ、城の位置を知つてるのは有り難い。案内してくれ

「わかりましたよーちゃんと働き分の小遣いくださいね。私は食べ物のためなら、何でもできますよ」

「あいあい、わかつたよ」

こうして俺たちは、ソラの先導の元で歩きだした。多分こんな悠長な雑談をしている暇はなかつたんだろう。

十八話、戦闘其の壱

町中では戦闘が繰り広げられていた。騎士が刺し、兵士がいなす。その後ろで神殿の魔法使いが魔法を放つ。傭兵は両サイドにいる。完全な騎士派VS神殿派の構図が出来上がっていた。俺はどちらにも加担することなく、透明化して街を駆けていた。

悲鳴を上げる人々。魔法の流れ弾に当たって泣きわめく人々。なにも感じない。せいぜいざまあみると思うくらいだ。俺が殺せなくて残念なくらいでもある。復讐の代行者などいらない。俺は自分の手で復讐をする。または、自分と同じ境遇の者で、だ。

「どうしますか？」

前を見ると城があつた。すでに城に着いていた。

「とりあえず内部潜入だが……」

地味にやつかいだ。と続けるのはやめた。だが、やつかいなのは事実だ。まず、透明化してもドアが開くのは気づかれる。自然な物の効果を「こまかすのが一番難しいのだ。

「仕方ないから、飛行でもするか……」

まあ、城は少し固めの守り、簡単には入れず、城門は閉じられていた。まあ、飛べば関係ない。便利だ。

「さて、飛ぶか。『飛翔→ペタオク』

呪文を詠唱して、空に飛び上がり、城の中に入ろうとしたそのときだつた。

「ネズミとは感心しませんねえ」

！？

俺は驚愕した。その声を発した方向をみると、確かに俺の方を向いていた。

「今は、確実に我ら神殿派が権力をつけるときなのに、それを、騎士ごとに邪魔されたくはありませんね。隠れた騎士さん？」
ばれている。俺は思った。なぜだ？ 俺はわからなかつた。透明

化はなかなか人に気づかれないはずだ……

「空気の流れですよ。まあ、今から死ぬあなたには、関係ありませんけどね、」

さらに驚愕。詠唱を始めた。これはまずい。透明化しているこちらを確実に見つけられる強さ。これまでの敵とは明らかに違った。

「《虹の光》ウラニオ・トクソスキア」

曲線状の光。数は……

七！？

一つ目、下から、俺は落ち着いて、後ろによける。二つ目、右斜め下、左前に。

「つー？」

声にならない悲鳴。俺の右から。ソラが少し腕を切った。致命傷にならなかつたのは、向こうが正確なねらいをつけられなかつたからだろう。透明化は解除されなかつたが、落ちた血は、確実に俺らの場所を伝える。

まずい！ 瞬間的に俺はそう思つ。場所が曖昧というアドバンテージが、半分奪われた。が、俺が思考している間も、確実に光の曲線は襲いかかる。透明化を声に念じる暇もなく、俺は相手にも聞こえる声で、呪文を詠唱する。

「《炎の球》フロガスフェラ」――

普段は中にも入つている炎を抜き、空洞状にして、発動する。予想以上に大きな炎の球体が、俺とソラを包み込む。

「なかなかやりますねえ」

炎の球がいとも簡単に四つの光の曲線を相殺してから、敵は言つ。

「まあ、負ける気はありませんけどね」

悠長にしている暇はない。次はこちらから攻勢に出る。

「《緋色火花》アリコシャラーラ」――

相手の現在位置に、火花を発動

「ここまで簡単にわかる攻撃も珍しいですね。魔力の流れで補足が一発ですよ。案外素人ですか？」

そういうながら、敵の姿が眩む。瞬間、敵の位置を発動位置にしていた俺の呪文は、あらぬ方向に発動される。

「私の位置をずらし、その上で魔法権の強奪。こんなの対策くらい初步中の初歩でしょう?」

そういうながら、敵は、俺に向かってくる。俺は魔法を防がれた驚きから、反応が遅れていた。

「遅いですね、《虹の武器》ウラニオ・トクソプロ」

敵が持っている杖が虹色の輝きを帯びる。そのまま杖を振りかぶり……

やばい。あれに当たつたら死ぬ。

勇者としての本能が語る。神速ともいえるような速度で、魔力を練り、

「《緋色の剣》アリコスパスイ」

俺の剣が緋色に輝く。まだ、終わっていない。負けてはいけない。反撃を誓い、俺はソラを地面に落とした。大丈夫だ。飛行魔法で、しつかり着地ができるようにはしておいた。

十九話、戦闘其の式

着地したか着地していないか。ソラがどうなったかを見る暇がないほど、激しい戦闘が続く。

緋色に光った俺の剣は、明確な決定打ともなれずに、敵の攻撃をなんとかいなしているだけだった。

ガキンッ！！！

緋色の剣と虹色の杖がぶつかり合ひ。が、剣は杖を押し切ることもできず、簡単に流される。

「魔力量、単純な腕力。どちらも達人レベルを超えた、未知の領域ですねえ」

敵が余裕そうにつぶやく。こちらは、急激な戦闘で、肉体的よりも精神的に疲れていた。そんな状態で、敵の言葉に言葉を返すような余裕はない。

「ですが、戦闘技術や、魔法の応用技術が足りないようでは、宝の持ち腐れですけど、ねっ！」

最後のかけ声とともに、敵はこちらに杖を振るってきた。なんとか、精神や息を整え、緋色の剣で防御する。

振るわれた杖を、剣で受け止める。そのまま相手の方へ押し返す。が、敵はこちらが攻勢に移ると同時に、杖から伝わる俺の力を受け流す。

「ちつ、『煉獄の炎』カサルティリオフロガ』」

炎魔法を、俺が唱える。上空から降り注ぐ、紅蓮の炎。

「魔法の筋が単純すぎますね、まあ、こんな短い間で魔法を乗っ取られなくしたのは、すごい技術ですが」

そう敵が言い、こちらの攻撃をよけた。魔法ですら簡単によけられ、武器の攻防は簡単にいなされる。防御面へ特化している。こちらの勇者になつただけの付け焼刃の攻撃など簡単に防がれている。「こちらが思考している間にも、向こうは攻めてきた。

「せいつ！」

杖が、こちらの右下から迫る。緋色の剣で、防ぐ。八方塞がり。どちらからも攻め手がない。

「なかなか堅いですね……」

方法、方法はないものか。無効に痛烈な一打を食らわすことができれば、この戦闘には勝利できる。

「《速き光》タヒティタメガロスフォスく』」

向こうが詠唱をする。瞬間。悪寒が体の後ろを駆けずり上がる。圧倒的な、速さ。それを向こうの呪文は持っていた。こちらを驚くべき速さで来る魔法を感知できたのは、勇者補正といつも他になかった。付け焼刃の勇者補正でも、敵の攻撃は感じられる。ここまでの思考を一瞬にして、俺は魔法を放つ。

「《多き炎の盾》ポラフロガアスピダく』 つーーー！」

瞬間に、周囲全方位に炎の盾を数多く出す。偶然か、多くを出したのが功を奏したのかはわからない。が、光の魔法が自身のところに届くことはなかつた。速き光の魔法。速い。魔法。

何かを思いつく気がした。わからない。速いのと魔法と、もう一つの何か……

黒き物体。人を殺す小型の物体。

銃

理解した。倒せる。相手は倒せる。魔法と物理攻撃。何も向こうの土俵で勝負することはない。元の世界なら元の世界なりの戦術はある。

完全に空氣に飲まれていた自分を反省しながら、俺は詠唱を開始する。

「《物質想像》イリコゴズイミウルギアく』」

銃弾。鉛の弾。金属を想像しながら作った小型の物体。それがこの世界に召喚されると同時に、俺は勝ち誇った顔をした。こちらの顔に何か危機感を抱いたのか、向こうも魔法を発動しようとする。が、

「『爆発』エクリクスイヽ」

単純なこちらの方が発動は速い。そして、威力を殺し、推進力を上げた点の爆発を、召喚した鉛玉にぶつける。

相手が驚愕の顔をする。魔法で乗っ取ることができない、ただの鉛玉。杖を使って防ぐとする、が、それではダメだ。

おれ自身も鉛玉と一緒に最大速度で前進する。魔法を唱えることなど忘れて、敵はただただ驚愕をする。

鉛玉の攻撃と、俺の剣撃。どちらも喰らえば致命傷になる。それを悟ったのか、相手は一瞬諦めたような顔をする。そして、俺の剣が、敵の首を碎いた。

「ふう……」

やっぱり、世界は広い。勇者補正があつても倒しづらい敵は今後も出てくるだろうな、と思った。まあ、強くて広い方が倒しがいはあるがな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9191w/>

世界を壊せや勇者様～world is broken a man of valour～

2011年10月10日03時16分発行